

起きるにはまだ少し早い時間。

洗面所で、穿き替えたばかりの下着一枚の姿で、手の中にある濡れて丸まったボクサーパンツをギュッと絞る。

ボタボタと音を立てて洗面台に零れ落ちた水が排水溝へと消えていくのをぼんやりと見つめながら何度かそれを繰り返して、最後にもう一度ギュッと固く絞って粗方水気が取れたのを確認した途端、激しい自己嫌悪が襲ってきた。

目が覚めて、夢精で下着を汚してしまっていることに気付いた時、それが男として当たり前の生理現象だと分かっているのも何とも言えない沈んだ気持ちになるのだが、今回はいつもの比ではない。

「……何であんな夢見ちゃったんだろ」

深く大きな溜息と共にそう呟くと、不意に下着を汚す原因となったその夢の中の光景が鮮明に脳裏に甦ってきた。



周囲は薄暗くてよく見えなかったが、ここが自室だという何を何となく理解していた。

しばらく佇んでいると、部屋の奥に何かが居ることに気が付く。

それと同時にふわりと浮くような感覚に捕らわれ、モゾ

モゾと動くソレに吸い寄せられるように体がゆっくりそちらへと向かっていった。

幽霊になったらこんな感じなのだろうかと考えていると、ベッドのある辺りで宙に浮いたまま体がピタリと止まる。

ふと真下を見ると、そこには『自分』がいた。

制服のズボンも下着も脱がされ、身に付けているのはブレザーとシャツと靴下だけという状態で身体を自由を封じられている『自分』が。

(な、何だよ、これ……)

ベッドに横たえられた『自分』は黒く細い布で目隠しされ、両腕は解かれたスクールネクタイで縛られ頭の上で一纏めにされていた。

足は大きく開かされ、腿とふくらはぎをくつつけるようにして片足ずつ成人男性用ベルトと自分が普段使っているベルトで固定されている。

M字型に拘束された両足の間では、まだ大人になりきれないペニスが恐怖心から力なく項垂れていた。

暗闇の中に浮かび上がるように見えた、己の持つ常識を遙かに逸脱してしまっているその姿に思わず息を呑む。

何でこんな事にとか、目の前の『自分』は本当に自分なんだろうかなどとぐるぐる考えていると、突如ベッド脇から人影が『自分』に覆い被さってきた。

(誰!?)